

# 住民参加型イベントによる風景づくり－愛媛県松野町における取り組み－

愛媛大学大学院 学生会員 ○濱上洋平  
愛媛大学大学院 正会員 倉内慎也  
愛媛大学大学院 フェロー 柏谷増男

## 1. はじめに

近年、高齢化、過疎化に伴う担い手不足により、集落の衰退、田畠を中心とする農村風景の崩壊が日本の各地域で深刻な問題となっている。そこで、交流人口を増加させ、地域衰退に歯止めをかけるべく、イベントやワークショップなど様々な活動が実践されている。

本稿では、同様の視点からの取り組みとして、まず愛媛県松野町目黒地区において2006年より実施している風景づくり活動について紹介する。次に、風景づくりの根底は人づくりであるという考えに立脚し、地域の風景を活かした住民参加型イベントが人々の意識変化や人的ネットワークの形成に及ぼす効果を分析する。

## 2. 風景づくり活動の概要

### (1) 対象地域

愛媛県松野町目黒地区は、人口が約400人、小学校の全校生徒が9人という典型的な過疎集落である。年々人口が減少しており、美しい農村風景や集落の維持が困難となることが懸念されている。

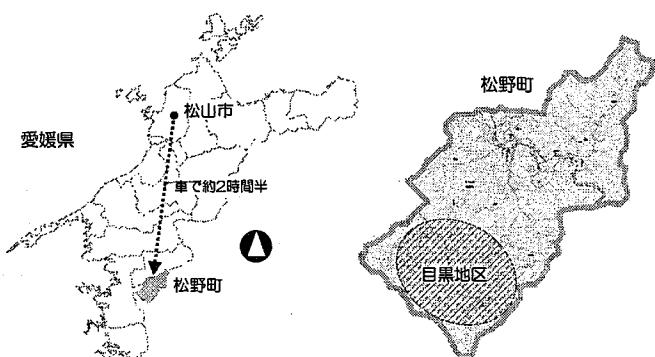


図1 研究対象地域

### (2) イベント概要

#### i) 蛍祭り (2006/6/17)

本イベントでは、地元住民にとって生活景となっている畦道を灯籠で照らすことによって、普段とは違う視点で風景を捉えてもらう「風景への気づきの場」の創出を目的とし、大学・国土交通省・地域の協働に

より企画した。参加者自身が灯籠を並べ、ライトアップされた畦道において風景歩きを行った。参加者は、地域住民60名、外部参加者140名の計200名であった。

#### ii) あぜ道コンサート (2006/10/14)

稲刈り後の田んぼの中に舞台を設置し、雄大な自然の中で音楽を楽しみながら風景に接してもらう目的でコンサートを開催した。参加者は、地域住民200名、外部参加者50名の計250名であった。



図2 イベントポスター

## 3. 分析手法

景観十年、風景百年、風土千年という言葉があるように、風景が作られるまでには長い年月がかかり、風景そのものへの効果を評価することは困難である。そこで、風景づくりの根底は人づくりであるという考えから、人に対する効果の分析を通じて、風景づくりに対する住民参加型イベントの有効性を検証する。

実施したアンケート調査の概要を表1に示す。本データおよび別途実施したヒアリング調査、ならびにPCメールデータを用いて、本研究では、イベントの実施による個人の意識変化、地域個性に対する価値観の共有、人的ネットワークの形成、の3点に着目して分析を行う。

表1 アンケート調査概要

項目	内容
調査実施時期	2007年2月4日～2月23日
調査対象者	イベント参加者(地域住民、イベントスタッフ)
調査方法	配票調査法
調査内容	<ul style="list-style-type: none"><li>○個人属性(性別、年齢など)</li><li>○螢の畦道プロジェクトへの参加状況</li><li>○個人の意識変化(参加前を「3」として5段階評価)</li><li>○地域個性に対する価値観の共有</li><li>○目黒地区のイメージ(52の選択肢より複数回答)</li></ul>
配布・回収状況	配布数:95部 回収数:59部 回収率:62%
属性	地域住民:29人 イベントスタッフ:30人

## 4. イベント効果の検証

### (1) 個人の意識変化

アンケート調査では、風景・景観への関心、地域・まちづくりへの関心など意識変化があると思われる8項目について、イベント参加前を「3」として、参加後の意識レベルについて5段階での評価を依頼した。図3より、全項目において意識レベルが向上していることが読み取れる。特に、「目黒の風景を大切にしたい」の項目について変化量が大きく、この地域の風景に対する意識が高まったといえる。

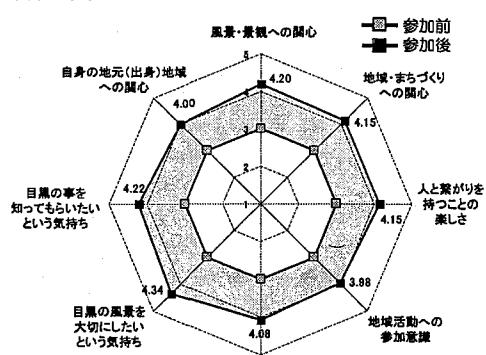


図3 個人の意識変化

### (2) 地域個性に対する価値観の共有

イベントに参加することによって皆と価値観の共有ができたと答えた人は全体の93%にのぼった。具体的にどのようなイメージが共有されたのかを図4に示す。これは、52個の目黒地区イメージ項目から当てはまると思うものを選択してもらい、X軸、Y軸にそれぞれ松野町住民、イベントスタッフにおける選択率を取ったものである。両者間で共有されたイメージは、目黒の自然景観を形成している「山」「川」「田んぼ」「畦道」などであった。これらのイメージについては、この地域の個性として価値観が共有されたといえる。

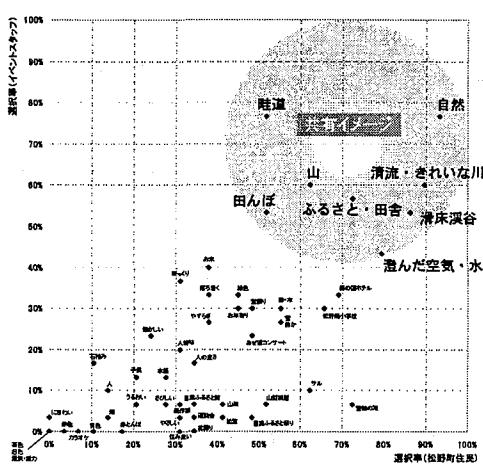


図4 共有イメージ

### (3) 人的ネットワークの形成

人的ネットワークの形成を分析するにあたり、2006年の5~11月にかけてのメールのやり取りに着目した。ネットワーク形成過程を時系列に沿って見ると、まず、大学、地域、企業の一部の者によってプロジェクトが開始され、次に行政がサポート的な立場で関わり、その後、学生、企業、地域住民へと全体的に広がっていたことが判明した。

次にメールの送受信頻度、つまり個人間のネットワークの強さに着目する。イベントにより形成されたネットワークを図5に示す。大学・企業・行政の間では強い関係が形成されていることが読み取れる。しかしながら、松野町地域と外部、また地元住民同士の繋がりはあまり見受けられず、現時点では、人的ネットワークの波及効果が地元住民にまで達していない段階にあると考えられる。

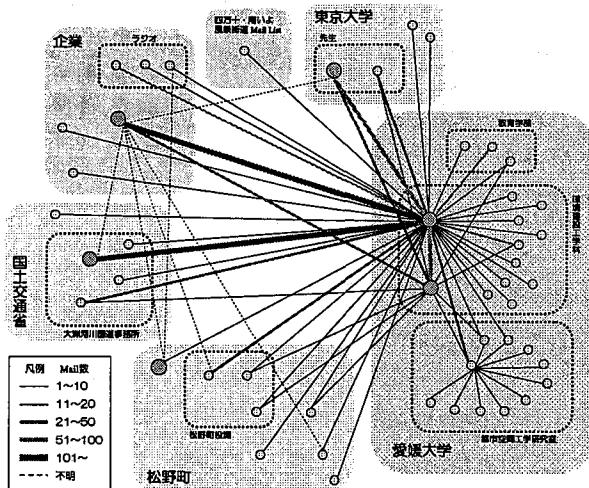


図5 人的ネットワーク

## 5. まとめ

本研究では、風景づくりとは、すなわち「人」をつくるということであるとの認識に立ち、イベントが意識や人的ネットワークの形成に及ぼす影響に着目して分析を行った。その結果、個人の意識変化や価値観の共有については明確な効果が確認でき、イベントの実施が当該地域の風景・風土の保全に少なからず寄与したものと考えられる。一方、現時点では、人的ネットワークが地元住民での交流の活性化までには至っていないという課題も挙げられる。今回のイベントでは、外部者の協力が大きく、結果として、地元住民の自発性が損なわれた可能性があり、今後は、地域から発信する地域住民主体型のネットワークの形成が望まれる。